

書評

アパドゥライ、アルジュン著、藤倉達郎訳『グローバリゼーションと暴力——マイノリティーの恐怖』、世界思想社、2010年、248頁、3,000円＋税

吉田 早悠理

本書は、2006年に Duke University Press から出版された *Fear of Small Numbers: An Essay on the Geography of Anger* の翻訳である。著者アパドゥライが『さまよえる近代: グローバル化の文化研究』の続編である本書は、暴力、グローバリゼーション、不確実性、マイノリティーをキーワードとし、今日の世界各地で起きている暴力、排除、拡大する不平等などについて考察を深めたものである。本書は、1998年から2004年に草稿が書かれたこともあり、インド、イラク、アメリカなどの事例をもとに、宗教・国籍・自由・アイデンティティーの名のもとで起きているテロをはじめとした暴力について分析がなされている。一方で、著者はグローバリゼーションの正の側面として、さまざまな市民運動や NGO からなる草の根グローバリゼーションにも注目している。なお、本書の末尾では、訳者が著者の経歴や理論的系譜をもとに、本書の詳細な解説をしている。そこで、以下、各章の内容を要約して、その後いくつかの点を取り上げて議論することとしたい。

第1章「民族の殺戮から理念の殺戮へ」では、民族浄化やテロといった暴力とグローバリゼーションのかかわりについて理解するために、近代国民国家が備えている理念について検討している。まず、国民を構成する単一の民族という観念が、戦争と犠牲のレトリックを通して創造されたことを指摘する。そして、ナショナリズムの観念だけでなく、社会生活における社会的不確実性の役割と暴力の関係を論じる。ここでは、「わたしたち」と「かれら」の境界が刻々と変化するなかで、暴力によって固定して内実をもったアイデンティティーという幻想に基づく確実性が作り出される。特に、暴力は「完全な帰属 (full attachment)」を動員するための手段でもある。これに対し、不完全性の不安を掻き立てるものとしてマイノリティーが挙げられる。マイノリティーは、マジョリティーの中に存在する小さな乖離であるため、マジョリティーはマイノリティーを排除し、殺戮を行う可能性が生まれるのだと論旨をたてる。

第2章「文明の衝突」では、アメリカで起きた9.11の同時多発テロとアフガニスタン戦争などの具体的な事例に言及しながら考察を深めている。ここでは、まずサミュエル・ハンチントンの文明の衝突のモデルを乗り越える必要性を指摘する。著者は、テロや不平等の拡大を宗教や文化などをもとにした二項対立によって分析するのではなく、脊椎型と細胞型という2つのタイプの対比をもとに理解するべきであると提案する。脊椎型とは、協調と統制を目的とする限られた数の規範と記号体系を前提として成り立つものであり、その例として近代国民国家を挙げる。他方で細胞型は、国境を越えて、文化的なものや職業や空間を超えて増殖するものであるとする。例えばアル・カーイダのようなグローバルなテロのネットワークは、細胞型組織を通してグローバル化するという能力を備えているという。この脊椎型と細胞型のシステムの相互補完性と差異に着目することで、グローバリゼーションの時代における国民国家の危機を構造的に分析することが可能になるという。

例えば、国民国家がつねに依拠してきた脊椎型の調整の原則を考慮しないテロとテロリズムは、軍事的空間と市民的空間の境界を崩してしまうのみならず、予測不可能性という要素を備えている。そのため、細胞型組織を通してグローバル化するテロのネットワークは、脊椎型の国民国家の秩序を無視し、平和を脅かし、人びとを不安にさせるのだという。そこで著者が注目するのが、近代国民国家のなかのマイノリティーと、グローバリゼーションによる近代国家の周縁化との関係にかかわる危機である。

第3章「グローバリゼーションと暴力」では、マイノリティーと暴力についてより深く論じられている。ここでの分析の対象となっているのは、世界中の、あらゆる種類のマイノリティーに対する攻撃である。著者は、マイノリティーもマジョリティーも、統計・国勢調査・人口分布図などといった国家統治のもとで、比較的最近になってできた社会的・人口学的なカテゴリーであることを指摘する。そして、マイノリティーがナショナリズムに特有な状況のもとで創り出されたものであるとする。さらに、国民国家の純粋さを脅かす存在としてのマイノリティーは、日常生活と、急速に変化するグローバルな背景とのあいだを媒介するいくつもの不安や不確実性を発動させる引火点なのだとする。だが、著者は、マイノリティーが暴力を誘引するというよりも、マイノリティーが不確かなものであるがために暴力の対象とされ、また暴力がマイノリティーを必要とするのだと指摘する。

第4章「少数の恐怖」では、ドイツのナチス、インドネシア、インドの事例などを提示しながら、マイノリティーがどのように攻撃の対象となるのかについて論じている。そこで著者は、捕食性アイデンティティーという概念を用いる。捕食性アイデンティティーとは、「集団がみずからのアイデンティティーを社会的に構築し、またそれを動員するために、それ自身に近接するほかの社会的範疇を抹消しなければいけないようなアイデンティティーである」(75)と定義されている。このような捕食性アイデンティティーを備えた捕食性マジョリティーが登場するのは、マジョリティーとマイノリティーの位置が簡単に入れ替わることがありうる、と考えられるような状況であると論じる。このような状況がマジョリティーに恐怖を感じさせると同時に、マイノリティーが完全に純粋なものではないということのを思い起こさせ、民族殺戮をはじめマイノリティーを対象とした暴力へと向かわせるのだとする。また、マイノリティーという小さな数が、すべての人間に共通する基本的な権利としての人権という観念と結びついたときに、国家の憲法や法律をめぐる重要な闘争基盤を提供し、大きな動揺をもたらす可能性があることを指摘する。ここで著者が重要なテーマとするのは、ささいな違いについてと、グローバル化とマイノリティーに対する怒りのあいだの特別な関係についてである。著者は、フロイトの「ささいな違いについてのナルシズム」についての洞察を拡張し、ささいな違いが特定の異民族に対する極端な怒りの源になりうるのだと論じる。このプロセスの根底には、マジョリティーとマイノリティーというカテゴリー間の内的な相互関係の力学があり、このふたつのカテゴリーのあいだの内的な相互依存が、一方がもう片方へと変身するのではないか、という恐怖を生み出す条件を提供しているのだという。

第5章「わたしたちのテロリスト、わたしたち自身」では、1990年代における不確実性と大規模な民族間暴力の関係について、インドとパキスタンを中心とした南アジアの事例を提示して論じている。ここでは、ひとつのグループが、他方のグループの存在自体を、みずからの生存を脅かすものであると感じはじめる過程が明らかにされている。ここでは、

グローバル・地域・国・ローカルそれぞれの空間の反復と反響の関係を理解するために怒りの地理学という概念を提示している。怒りの地理学は、暴力が空間や場所、原因と結果といった明白な図式ではなく、さまざまな要因による複雑な相互作用によって生み出されるとする。とりわけ、社会生活の不確実性と、国家や国家間の不安定性が新しい緊張関係をもたらし、暴力をもたらすという。その際、さまざまな要素を結合する重要な役割を担っているのがメディアである。メディアやインターネットは、遠く離れた地域で起きている事件や攻撃を報じ、孤立した国内のマイノリティーが、細胞型のグローバルなテロの世界と自らを重ね合わせることを可能にする。これによって、マイノリティーは別の種類のマイノリティーの声を代弁することさえ生じるのである。

第6章「理念の殺戮時代の草の根グローバリゼーション」では、理念の殺戮時代における草の根グローバリゼーションについて言及している。理念の殺戮とは、「国民や国々が生活様式の全体が、有害で、人間以下のものであり、「社会的な死」が与えられるのがふさわしいものだとみなされるという現象である」(166)。本書で著者が扱う、民族殺戮や集団殺戮を含むさまざまな形態の暴力は、特定の国家や政治体制ではなく、文明イデオロギーと思想のすべてが標的になるため、〈理念の殺戮〉の衝突、あるいは〈文明の殺戮〉の衝突と呼ぶべきであると主張する。この理念の殺戮は、憎悪を抱く具体的な経験が欠けていても、遠距離の共感、遠距離憎悪によって導かれる。グローバルな細胞型ネットワークによって行われる暴力は、国民国家のシステムを脅かすものでもある。だが一方で、著者は、細胞型のグローバリゼーションのユートピア的側面として、さまざまな市民運動やNGOからなる草の根のグローバリゼーションの動きにも注目している。彼らが国家・国際援助機関・政党といった既存の強力な利益集団の手先にされることもなく、活動を続けていることに関して、細胞型の民主化の姿として評価する。そして、そのような細胞型組織が民族殺戮と理念の殺戮へと向かう世界的な潮流に対抗するための資源とし、希望の光を見出している。

*

以下、本書が提示した課題について論じたい。著者は、本書において各地で起きている暴力とグローバリゼーションの関係を、サミュエル・ハンチントンをはじめとした論客が、暴力は文化や宗教などの違いや対立から生じるとみてきたのとは大きく異なる視点から切り込んでいる。今日、グローバリゼーションのもとで、国家の安全保障の問題と、民間人の日常の不安の問題が絡み合い、このような境界の混沌がテロ、テロリズム、テロリストとしてたち現れていると指摘する。このような状況のもとでは、文化や文明、宗教を空間化することは幻想であり、グローバルで、非空間的なテロをはじめとした暴力を理解することはできないとする。そして、グローバルな世界を細胞型として理解し、今日の暴力を脊椎型と細胞型のせめぎあいとして理解することを提案している。加えて、多様なマイノリティーが一斉に暴力の標的になっていることについて、「遠距離憎悪」によって「顔の見える関係」が「顔の見えない関係」に接続される怒りの地理学の過程をもとに、理念の殺戮として読み解いている。このような議論は、従来の国家や文化を中心にした議論では説明することが困難なテロをはじめとする暴力を検討する上で、有益な知見をもたらす。

しかしながら本書では、グローバリゼーションのもとで人々がどのように不安や恐怖を抱いているのか、人々がどのように「顔の見えない関係」とつながり細胞型組織をつくる

のかといった具体的な姿が十分に描かれているとは言いがたい。本書では、主として南アジアの、特に 9.11 と 2001 年以降の対テロ戦争の影響を受けたインドを事例として提示し、国家・社会・宗教・経済といった局面をもとに暴力が生じる過程について説明がなされている。インドでは、この時期、ヒンドゥー右派が選挙で勝利をおさめた。9.11 は、ヒンドゥー右派にとって、インドのムスリムとパキスタンを同一視するという格好の機会になったという。その結果、ヒンドゥー右派は、国内のヒンドゥーとイスラムの歴史と対テロ戦争をひきつけて、反イスラム感情を煽る政策を実施した。著者は、具体的な経験が欠けた「遠距離憎悪」によって、悪というイメージを持った自己達成的な他者を作り出すことで、彼らを暴力の標的にするのだと主張する。そして、国家の政策とそれに伴って人々が起こした暴動を概観しているものの、日常生活においてヒンドゥーとムスリムの隣人たちがどのような関係にあり、国家政策によって両者の関係がどのように変化したのかについては詳述されていない。日常生活を共にし、喜怒哀楽の感情に共感・共有する顔の見える親密で具体的な経験を備えた人々の関係が、不安、怒り、恐怖の感情に覆われ、「親密な暴力」へと転じていく怒りの地理学について、もう少し具体的に書かれていると、より理解が深まっただろう。また、本書の目的からは若干ずれるが、「顔の見える関係」と「顔の見えない関係」が繋がる一方で、人々が暴力へと向かった後に、「顔の見える関係」にある人々がどのような過程を経てその関係を再構築するのか、あるいはしないのか、このような点についても目配りが欲しかった。

暴力の対象となるマイノリティーは、文化・政治・民族的マイノリティーなど、さまざまであるが、著者は 20 世紀後半以降、人権という観念が重要な共通概念として用いられるようになるなかで、実質的・社会的マイノリティーが憲法上・政治上の焦点になってきたという。その際、マイノリティーの権利はさまざまな国において、市民権・正義・政治参加・平等についての、憲法や法律をめぐる重要な闘争の基盤を提供したとする。近年、国家は国際的な人権思想のもとでマイノリティーの権利に対して憲法や法律による保障やアフーマティブ・アクションをはじめとした優遇措置をとることが求められる一方で、そのことがマイノリティーをさらマイノリティーたらしめ、マジョリティーとの差異を作り出すという状況が起きている。このことは、著者がグローバリゼーションの「希望の側面」と呼ぶ草の根グローバリゼーションにおいても同様であるといえないだろうか。国家の政策のほか、NGO や市民活動によるマイノリティーの人権や生活の保障を目的とした活動が、ひいてはマジョリティーの政治・社会的生活を脅かすことにつながり、様々な権利を獲得しようとするマイノリティーに対してマジョリティーが恐怖や怒りを感じることにつながる可能性も否定できない。このように考えると、NGO や市民活動などを、ただ一面的にグローバリゼーションの「希望の側面」と呼ぶことができるのか疑問が残る。

また、著者は本書の冒頭で、貧しい人、疎外された人、弱い人、周縁化された人びとは、グローバリゼーションをもっとも必要としながら、もっともその恩恵を受けていない人びとであると述べる。だが、なぜそのような人々がグローバリゼーションの恩恵を受けていないのか、またグローバリゼーションの恩恵とは何を指すのかという点について、具体的な言及はない。ここで著者の述べるグローバリゼーションの恩恵が、グローバリゼーションによる「希望の側面」であるとするならば、本書のキーワードとなる恐怖や不安の一方で、希望がどのように生まれるのかについても検討する価値があるだろう。そして、人々

がその「希望する能力」によって、恐怖や不安を乗り越え、どのように希望をつないでいくことが可能なのかという点についても論じられなければならないだろう。ただ、著者はグローバリゼーションの「希望の側面」については別に論じるとしており、暴力と希望のグローバリゼーションの二つの側面がどのようにつながるのか、今後の展開が待たれる。

これまで人類学は、「顔の見える関係」を緻密に描くことを目標のひとつとしてきた。多くの人類学者は、自らのフィールドのさまざまな側面において、グローバリゼーションの影響を目の当たりにしている。人々が、「顔の見える関係」と「顔の见えない関係」をどのように接続し、ローカル、ナショナル、グローバルの連動的な空間を生活しているのか、日常生活や人々の関係を丹念に解き明かし、グローバリゼーションが人々の生活にどのような影響を及ぼしているのか、実証的に論じる必要がある。この点においては、フィールドを通時的・共時的に濃密に描こうとする人類学の貢献が一層求められるに違いない。

参考文献

アパドゥライ, A.

2004 『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』、門田健一訳、平凡社。